

# 樣略カチヤニ樣

棟田 博 著

昭和39年4月25日

拝啓 カ ア チ ャ ン 様

¥ 280

著 者 棟 田 博

発行者 秋 田 貞 夫

印刷所 三晃印刷株式会社

発 行 者 株式会社 秋 田 書 店

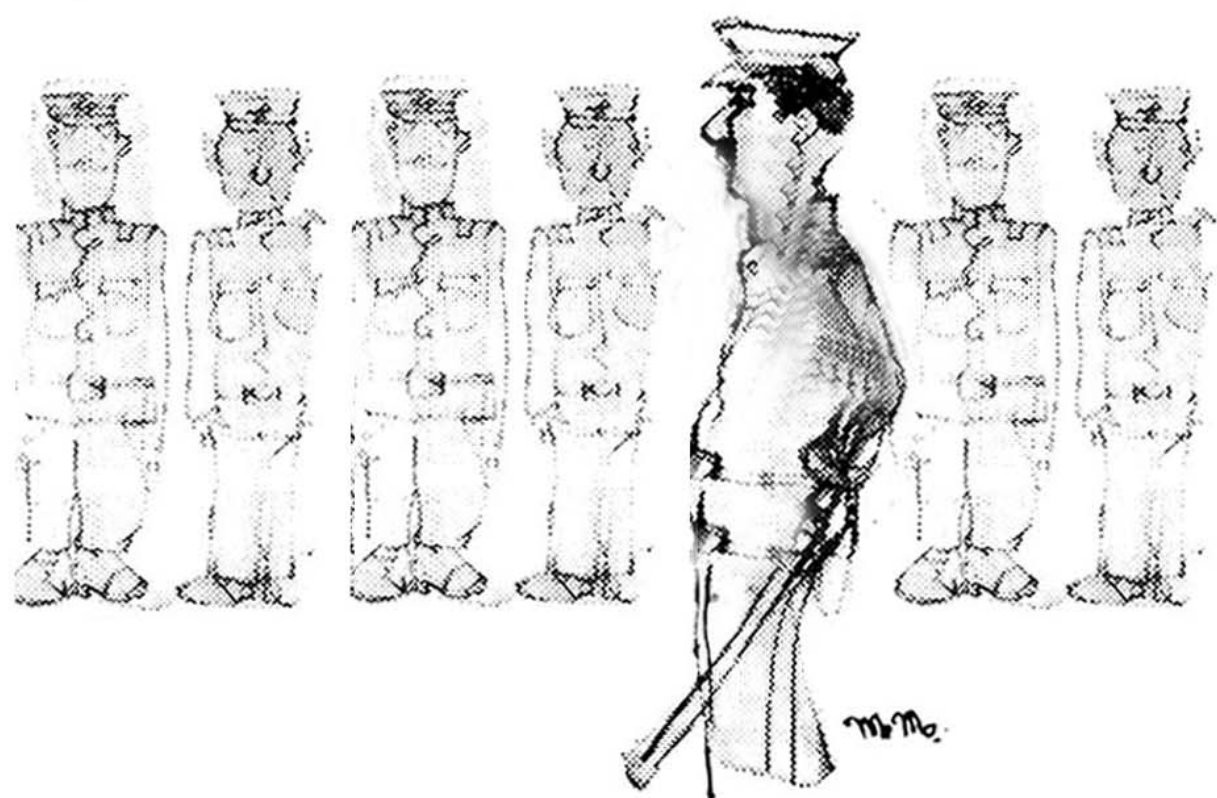
東京都千代田区神田三崎町2-21

振替東京99353・電話(261)5151~5

もし、落丁乱丁がありましたら、本社でお取り替えいたします

# 様カダカチヤン様

棟 田 博





## ■ も く じ

|                  |     |
|------------------|-----|
| 刀と鼻・・・・・・・・・・    | 五   |
| ビンタと鉄兜・・・・・・・・   | 一六  |
| あの射撃この射撃・・・・・・・・ | 二八  |
| ペッタンコ・・・・・・・・・・  | 四〇  |
| コンコンチキ・・・・・・・・・・ | 五二  |
| 坊さんカンザシ・・・・・・・・  | 六三  |
| 馬当番兵どの・・・・・・・・   | 七四  |
| 塩辛トンボ・・・・・・・・・・  | 八六  |
| われこそは・・・・・・・・・・  | 九七  |
| 二階級昇進・・・・・・・・・・  | 一〇九 |

|                 |     |
|-----------------|-----|
| お手々つないで・・・・・・・・ | 一二〇 |
| トツゲキ・・・・・・・・・・  | 一三三 |
| 金鵒勲章・・・・・・・・・・  | 一四六 |
| さらばメンコめし・・・・    | 一五七 |
| 新婚旅行・・・・・・・・・・  | 一六九 |
| さぞや満州は・・・・・・・・  | 一七九 |
| スパルタ新免流・・・・・・・・ | 一九一 |
| こんな時代・・・・・・・・・・ | 二〇二 |
| 赤紙・・・・・・・・・・    | 二二三 |
| 今ぞ出で立つ・・・・・・・・  | 二三三 |

カバー・さしえ

森吉正照

# 刀と鼻

## 1



そのころの入営日は一月十日で、満期除隊日まんきじょたいは翌年の十一月二十五日であった。

そのころ……というのは、戦争の「セ」の字もなかった「古きよき時代」昭和の初年のころである。

ところで――。

当時は、なにかというと、

「なんだ、まだ兵隊検査もすまなくせに……」  
とか、

「徴兵検査ちやうへい前の半人前の若僧のしでかしたことだから、まあ大目にみてやってください」

などというふうに、徴兵検査というものが、半人前と一人前との区切りをつけるラインになっていた。

その徴兵検査は、二十一歳の年に執行しつこうされる。いわゆる親にも見せないトコロを見られるわけであるが、稀まれに勇敢な奴がいて、検査官の軍医の手にさわられたとたんに、ムクムクとおっ立てた。すると、

「うむ。なかなか元気があってよろしい！」

と、ほめられたので、次に肛門を見てもらうべく、軍医に後ろ向きとなり、両手を前に突くや、一発、いい音を放つと、

「よし！ その意気じゃ」

と、尻しりをぴしやりと叩かれた。などという話があるが、多分、眉唾まゆつばものであろう。

兵隊にとられるか、とられなのいかの岐れ目の心境というものは、とてもでないが立つの、放つのと  
いった状況ではないのである。

ぼくの故郷の町では、毎年、兵隊検査場は小学校の講堂があてられていた。小学校はお城趾しろあとの石垣の下にあった。ぼくが検査を受けたのは、今も憶えているが、お城の石垣の藤の花が真盛りまつさかだったから、晩春初夏であつたろう。

検査の順序じゆんじよは、身長、体重、目、耳、歯……そして、いよいよ、刀の検査になる。

もしも、このとき刀が錆びさびてなどいようなものなら当人の不面目はいうまでもなく、ひいては一家一門町村の名誉にもかかわるのだった。

胸に覚えのある者は、無事、検査にパスするまでは、まことにもって気が気ではなかったのである。

ぼくは、しかし、この時まで、まだ、一ぺんも鞘を払ったことがなかった。その点、はなはだ気が楽だった。

ところで、ぼくの前列の男が、刀の検査場にはいつてから、にわかには、モジモジしはじめたのに気づいた。

彼の検査用紙に「新免菊松しんめんきくまつ」と記入してあるのをぼくは見届けていたが、見たこともない男である。多分、付近の農村の出であろう。いかにも、ぼくなどにくらべると筋骨きんこつ逞しい。が、挙措動作きよそどうさは、よくいえば鷹揚おうよう、悪くいえばちとモツサリしていた。

順番がしだいに迫ってくるにつれ、新免菊松のモジモジぶりは、さらに一層、モジモジする。そつとぼくがのぞいてみると、検査用紙をぴたりと、前にあてがっていた。

さてこそ、この新免菊松という男、錆び刀だなど  
ぼくは了解したのである。

(軍医殿に、どのような大目玉をくらうだろうか)  
刀の検査官の軍医は、鉄ぶちの近眼鏡をかけて、  
鼻下に太い髭をたくわえている色の黒い大尉殿であ  
った。

新免菊松のモジモジぶりでもあるが、ぼくの胸も  
他人ごとならず、ドキドキしてきた。

そして、とうとう、新免菊松の順番となったので  
ある。

軍医殿の横に、事務机を据えて助手の衛生伍長が  
控えている。

「おい。用紙をこっちイ出さんか」

「ヘッヘイ」

その返事をしたが、まだ、新免菊松は検査用紙を

前にあてがったままだった。助手の伍長がやにわに  
手をのばして、ひったくるように取り上げた。

次の瞬間、事務的な仕草で、目の前の刀へのばし  
かけた軍医の手が、途中で、つと、停まったので  
ある。

ぼくは胸がとどろいた。

ややしばらく、じいっと刀を鑑定していた軍医は  
鉄ぶちの眼鏡ごしにじろりと新免菊松を見上げた。

(これア、でっかい雷が落ちるぞ！)

だが、アテがちがった。軍医は改めて刀へ手を出  
しながらいったのである。

「優秀なのを持つとるのオ。大切に使えや」

## 2

検査がとどこおりなく終了すると、壮丁検査執行

官殿の講評並びに訓辞くんじである。

壮丁は全員講堂に集合する。甲種合格者が前列。

第一、第二乙種及び丙種は後列である。

前列の連中の顔色はあまりよくなく、後列の連中のそれはスカツとしている。

壇上だんじょうに立った執行官の老大佐は、まず、後列の連中に向かって、

「不幸にして諸君は甲種合格とならなかったが、しかし、決して悲観することのないように……。一旦かんきゅうの秋は、あるいは諸君にも栄えある令状がくだされて、尽忠報国の機会が与えられないでもないのである。そのことを心によく銘じて、在郷にあつてそれぞれの家業に精進しやうじんするよう、念のため注意をしておく」

後列の連中は悲観など誰ひとりしてはいない。悲

観しているのは前列の連中である。

「さて——」

と、次いで、老大佐は前列へ向かい莞爾かんじとする。

「まずは、諸君。おめでとう！ 心からなる祝意を表する。さぞかし、みんなは嬉しいことであろう。本官もまことに欣快至極きんがいしごくである。申すまでもなく、諸君は選ばれたる青年である。もはや、只今以後は帝国の軍人と申しても敢えて差しつかえないのである。すなわちだ。今日、只今以後の諸君の身命は、諸君の身命であつて、しかして諸君のものではないのである。

畏れ多くも、大君に召されたる栄誉ある身命である。——されば、来たるべき晴れの入営の日まで、さらにいよいよ、自重自愛して、当日は一名の事故者もなく、連隊の営門をくぐるように切望して止ま



ない。以上、終わ  
り！」

これにて、解散<sup>かいさん</sup>  
となる。

校庭から校内へ  
と、晴れ晴れした  
足どりで、はしゃ  
ぎながら出て行く  
のは、後列に並ん  
でいた連中で、前  
列組はいいあわせ  
たように、言葉少  
なで且<sup>か</sup>つ足どりが  
重い。

ぼくもその例に

洩れなかったが、校門の外のだらだら坂のところ、

「あんたも陸軍かのオ？」

うしろから来て肩を並べた男にそう訊ねられた。

身体検査をすべて終えると、最後に執行官の面前に立つが、そのとき、用紙に甲種のハンコと、「陸」か「海」か、どっちかのマークを捺おされる。ぼくのは「陸」だったから、

「ああ、そうや」

と、答えると、

「わしもじゃ。同じ中隊にはいりたいもんじゃのオ」

これが、新免菊松と交した会話の最初になった。

それにしても、このとき、ぼくが彼の鼻に関して注意を払わなかったのは、「兵隊にとられた」という決定的事実を前に、多分、怏々おうおうとしてこころ愉たのしまなかつた故であつたろう。

いまだ鞘を払わないぼくだとて、刀と鼻が正比例するという俗説くらいは承知していた。

後日。ぼくは、はてなと考えてみた。果たして新免菊松の鼻は、大きかったか、どうか。どうも、大きいとも小さいとも、まるで記憶がないのである。すると、おかしいことには、仕残しの宿題のようにそのことが気かりになった。

ところで。――

徴兵検査がすむと、卯うの花の匂う垣根にホトトギスが来て啼き、お城山の上空に入道雲の峯がそびえ立って夏祭が来る。すると早くも山国の朝晩の風はひんやりとする。やがてコオロギの声がかぼそくなると松茸のシーズンも終わりを告げて、奥山の頂が早くも新雪に眩まぶしい。里にも間もなく雪が来て、さてお正月となるわけだが、今年の正月はぼくにとつ

て、あまりおめでたくはない。

まだ屠蘇とそ気分の十日の朝には、連隊の営門をくぐらなければならぬのである。

3

その日は、カラリとした冬晴れの上天気だったが半田山おろしが耳に冷たかった。

営門をはいると、営庭に第一中隊から第十二中隊までの記号板が並んでいる。

ぼくの令状には第二中隊とあったから、その記号板のところに行った。

「ほっ！ 同じ中隊になったのオ」

懐しげな声をかけてきたのは、新免菊松だった。

ぼくも懐しかった。右も左も見知らぬ者ばかりの

中で、心細い思いをしていたときである。

「よかったなア、一緒に。まあ、よろしく頼む」

ぼくは、このときも、彼の鼻に注意を払うのを忘れた。

「みんな聞けい。ここは、第二中隊である。もう一ぺん、令状の中隊号数を確かめてみい」

特務曹長とくむそうちやう（当時はまだ准尉じゆんいという呼称はなかった）が大きな声で言った。

「みんな第二中隊と書いてあったか。では、これより呼名点呼をとる。呼ばれた者は、元気よくハイと答える。わかったな」

点呼てんこが完了すると、中隊兵舎へ引卒されて行き、内務班割りを達せられる。

ぼくは第三班だった。新免菊松もだった。

「ほっ！ また同じ班になったのオ」

班長の引卒で、はじめて内務班にはいる。被服の

支給が始まる。

作業衣、三装さんそうの甲、乙の上衣と袴こ（ズボン）、軍帽ぼう、編上靴へんじょうか、上靴じょうか、営内靴えいないかといったものである。

「注文ではないけに、ぴたりとはゆかん。少々のところは身体からだのほうで合わせる」

と、班長ばんちやうが怒鳴る。

ダブダブの奴やつができ上がったたり、きゅうくつそうなのができたりする。そのイタにつかない軍服姿がいかに初年兵らしいのである。

「あのウ、班長さん。このズボンは前が開いとらんけエどもが、シヨンベンするときには、どがいしらええかネ」

新免菊松であつた。

「なに、前が開いとらんだと、どれどれ……」

そばに行った班長は笑いだした。

「ウワッハッハッハッ……。それはお前うしろまえ、後前じゃ。逆さまにはいとるではないか」

「ほっ！ そんなじゃ、こつちが前で、こつちが後ろでがンすか。わしらわしらが野良に出るときにはく股引きパッチとは、アベコベにできとるんじやな」

新免菊松が、班内の注目をまず浴びたこれが最初である。

被服の支給が終わるころ、昼食になる。

本日は赤飯にお頭かしらつきの魚がついている。いわゆる、軍隊用語でいう「一装めし」であるが、この一杯の盛りきりめしが、これから二年後の満期除隊の朝までに、泣いても笑っても食べなければならぬ二千百九十杯の第一杯目にあたるわけだった。

入營第一日の初年兵たちには、食欲はない。が、残しては悪いのだと思って、無理矢理に口の中へ入

れる。

軍隊というところは、早めし、早ぐそと聞き及んでゐるから、ろくすっぽ噛みもせず、けんめいに胃の腑へ送りこむ。

それでも少しは食べ残してしまふ。初年兵の全員が箸を置いたあと、一人だけ、ゆうゆうとパクついていたのが新免菊松だった。

初年兵掛りの上等兵が、ニヤニヤしながら眺めていたが、

「新免。どがいぞ、軍隊のめしは。うまいか？」

「ヘッヘイ。うまいでガス。なんせ魚は久しぶりだすけに。赤飯もお祭りこのかただすらしい」

「ハッハッハッ……」

上等兵は笑ったが、

「新免。ヘッヘイという返事はいけんぞ。軍隊では

ハイだ」

「ヘッヘイ。ハイ！」

やつと箸を置いた。めし食器も、副食食器もキレイに平らげていた。

4

昼食が終わると、

「初年兵は宣誓式場へ集合！」

の聲がかかる。

空室の第六内務班が式場にあてられる。

まず、中隊長の軍人勅諭の奉誦に始まり、型の如き訓辞のあと、初年兵は順次一名ずつ中隊長の面前に進んで、机上に用意されている宣誓書に署名するのである。

約百名近い初年兵が、一人ずつ、おずおずと出て

行つて、寒さにかじかんだ手に毛筆を握り、一字一字、ていねいに借書で書いてゆくのだから、ひどく時間がかかる。

火の気などむろんなく、廊下の風が吹き抜けの空室だから、足もとからぞくぞくと冷える。

ようやく、新免菊松の順番が回つてきた。彼の次がぼくだった。

新免菊松は、どうやら起立中に足がしびれたらしい。やや、びっこをひきながら中隊長の面前に進み出た。

手に、ほーっ、ほーっと呼吸を吐きかけてから筆をとつて、小学生のようなタドタドしい文字で姓名を認めたが、硯箱を筆に戻しながら、

「あのウ、中隊長さん！」  
と、呼んだ。

異例のことがらだったから、並いる中隊の幹部たちはハツとなった様子だった。一しゅん、寂たるしじまの中で、しかし、新免菊松は持ち前のテンポのおそい語調で、こんなことを言つたのである。

「わし、シヨンベンがはずんで、今にも洩れそうで困つとるが、便所はどこだすかいネ？」

「こ、これッ！」

特サン（特務曹長）はあわてた。

「中隊長殿に向かつて、な、なんたることを……」

そして、新免菊松の腕を掴んで、便所へ連れて行つた。

「こ、こら！ 神聖なる宣誓式の式場において、お前のようなことをぬかした奴は、中隊の歴史始まつて以来空前じゃぞ」

新免菊松は、じゃア、じゃアとホースを抜きな

がら、

「けんども、あそこで立ち小便するのは悪かろうけに、そんで、わし……」

「ううむ！」

と、特サンは唸<sup>うな</sup>った。

「じゃによつて、式場にはいる前に、小便の出たい者はしておけと注意したろうが」

「ヘッヘイ。いや、ハイ」

「なぜ、そのとき、しておかん。——これッ、まだ続いとるのか」

「ヘッヘイ。いや、ハイ。まんだ半分くらいだす」

特サンは、三度、唸った。

「前人未踏、破天荒の所業をしくじってからに、よくもまあ、そうやってゆうゆうと垂れておれるものだ。——まだか？」

「もう、少しですけに。そうせかさずに、ゆっくりさせてつかあさいや」

新免菊松の名前が、一躍、中隊中に鳴りひびいたのは当然であろう。